体感のアンビバレント

鷲　谷　洋　輔

湿った襟が心地悪い。首もとから熱気が上がっている。壁の時計を見やる。9時まであと10分。もう終わりだ。もう上がってもいい。
乱取り[1] の声がかかった。「やりたい人のみ、10分間。」先生の言葉が終わるのを待たずに、もう既に壁際にしゃがみ込んでいる者がいる。相手を探してうろうろし始める者もいる。自分は動くことなく、畳の真ん中で突っ立ったまま、ゆっくりと帯を締めなおす。「やろうか」ミロザがやってきた。やっぱりきたか。「やろうか」と低く答える。それ以上言葉を交わさずに、隅の空いたスペースに移動する。ミロザは盛んに両手を握り合わせて手首を回している。首も回している。隣では2組の乱取りがもう始まった。ミロザと程よい距離を挟んで向き合う。狭まる視界の真ん中にミロザが立っている。ミロザのからだはせわしなく左右に揺れている。礼。「はじめ」。

2012年の秋、カナダで大学院生活を始めたばかりの私は、「言葉の壁」に苛まれていた。特に教室でのディスカッション。言いたいことがうまく言えず、うまく聞き取れない。「言いたいこと」をかたちづくることも、聞き取るべき音を選り分けることもうまくいかない。それはディスカッションに参加する以前の問題だった。たとえば10人程度が座る教室で、何も発言せずに頷いていれば、理解しているというポーズとして流される。実際のところは、話のテーマを把握するところで躓いてしまっている。言葉がわからないことを吐露しようものなら、その場にいる資格に自ら疑いを唱えることになりかねない。ならば当座は、だんまりを決め込むほうが無難だ。そういう決断をすることは、その場にいる最も重要な目的を放棄することでもある。参加しているフリをしながら参加を放棄しているという事実に向き合い続ける時間はずいぶん重たいもので、じりじりとしか進まない。

もどかしいのは教室ばかりではない。課題の図書や論文の束の分厚さ。その厚さを凌駕する、アルファベットの列。字面を目で追うが、意味が伴ってやってこない。スキャナーの取り込み部分のように目は動く。だが、居並ぶ文字列はきれいに置き去りにされていく。見るという行為だけが展開され、意味がぱらぱらと剥がれ落ちていく。たしかに動いているが、何も出てこないコピー機のように、言葉を取り込むことも、吐き出すこともままならない。これで博士論文が書けるのだろうか。斬新なテーマや方法を見つけることが研究の出発点ではないことが突き付けられる。そもそも何を差し置いても、言葉を聞き入れ、発し、読み、書くということがその根底にあるではないか。

トロント郊外の柔道道場との出会いは、「言葉の壁」を迂回することを強く求めた延長線にあった。それまで、モントリオールの柔道道場の調査[2)]を経験していたが、そこでの私は道場をうろつくある種の傍観者であり続けていた。畳の上で柔道着を着込む人びとのそばで、Tシャツとジーンズはどうにもしっくりいかなかった。博士論文を英語で書き上げるという私的な困難を前に、せめてその取り口はもっとフィジカルでコーポリアルなものにしたい。とにかく自分のからだを使って研究の素材を集めることを基本線に据えれば、少なくともそれは、アルファベット的世界に埋もれたものにはならないはず。教室のようにスムーズな会話が流れるだけがフィールドではない。聞き取れず、誤解し、耐え難い無言に向き合うのもまた、フィールドのリアリティではないか。

こうして「言葉の壁」をめぐる私的なコンテクストを背負いこみながら、研究活動もまた進み始めた。トロント市内で活動していた道場のホームページをざっと見て回ると、ある道場がひときわ目を引いた。私には見慣れないキリル文字が散らばっている。先生の名前はいったいどう発音するのかわからない。ウクライナに関係があるようだが、先生の顔つきはどことなく日本の親戚を思い起こさせる[3)]。柔道着を着て顔を寄せ合う子供たちの写真が並ぶ。結果的に、この道場で柔道を学ぶというフィールドワークが、博士論文のテーマを導くきっかけとなった。本稿は、そこで私がいかにしてビデオカメラをフィールドに持ち込むにいたったかを辿る。フィールドワークを通じて、具体的な方法に行き着くまでのプロセスを遡りながら、その方法論的な意匠を提示するのが本稿のねらいである。

＊＊＊

冒頭の出来事は、通い始めて二週目のことだった。道場の玄関の左右には雪がうずたかく積み上げられていた。玄関マットの周囲には撒かれたばかりの融雪剤が散らばっている。溶けだした雪であちこち濡れた靴だなにブーツを入れていると、更衣室の薄い壁越しに低い声が響いてきた。ロシア語。更衣室のドアを開けると、とにかく毛むくじゃらで筋肉質なからだが視界を占領した。顔にはかなりのぎょろめが光を放っている。黒々とした髭が頬まで覆っている。自分と同じくらいの背丈だろうか。少し小柄かもしれない。シャツを脱ぐのを中断し、足元のバッグをかわしながら寄って来る。確実に自分より重いだろう。90キロに収まらないのではないか[4)]。握手を交わす。どこから来たか。日本のどこか。何をしているか。いつからここに来ているのか。どこに住んでいるのか。こちらの質問には手短に答えるばかりで、淀みない英語を発し続ける。隣にいるレニーは静かに傍観している。彼とは先週何度か顔を合わせたが、レニーとこの青年—ミロザ—はあまりに対照的だ。細身で背の高い、色白のレニー。たしかウラジオストク出身で、道場からそう遠くないカレッジでコンピュータサイエンスを専攻していると言っていた。レニーに比べると、ミロザは異形だ。体毛の量。上背はないが、腕が長い。脚は短めで、重心はかなり低い。必要以上は喋らないレニーのそばで、ミロザは延々としゃべり続けている。アゼルバイジャン出身。レニーと同じカレッジに通っている。エンジニアリング専攻。バッグを開けて着替えを始めた私のそばで、レニーに向かって英語で話しを継いだところ、私はミロザに好印象を持った。彼らの会話を私が分かるままで引き継いだのは、少なくともある種の包摂のポーズとして受け取れたからだ。

その日初めて挨拶を交わしたこの好青年に、その後私はしたたか投げられ続けたわけだ。何度投げられたかわからない。畳から立ち上がることと、畳に投げつけられることがまるで私に課せられた一つの作業のようだった。投げられるために立ち上がり、立ち上がるために投げられる。激しく抵抗しているはずなのに、抵抗などなかったかのように事は淡々と繰り返された。

＊＊＊

乱取り終了のブザーが鳴る。ミロザは右手を胸の位置まで挙げながら近寄ってきた。肘を90度に、指先を上向きに手をはじいて握りあわせる。握力の違いが手のひらに残る。その後の乱取り相手を求めて私に視線をあ

わせてきた人はいたのか知らない。声をかけられたとしても、応える余裕は自分にはなかった。特に誰とも目を合わさずに壁際に向かう。横たわるレスリング用のダミーの隣に座り込む。額から汗が滴り落ちている。壁の外は氷点下十度以下の真冬に、こんなに汗をかいている。袖で拭おうとしても、分厚い柔道着の生地にわずかに染み込むだけで、汗は吹き出し続けている。

> 練習終了。なんとか立ち上がって列に並ぶ。全体で礼をして、一人一人握手を交わす。ミロザは特段フレンドリーに手を差し出してきた。今日は居残り練習する者はわずかで、メンバーのほとんどがさっさと更衣室へ向かっていく。ロシア語の談笑が低く響いている。道場の隅で仰向けになって宙を見つめる。倉庫を改造した道場の天井はやたらと高い。剥き出しの梁に吊り輪が二つぶら下がっている。どうやってあそこに取り付けたんだろうか。先生がやってきた。起き上がって姿勢を正す。今日はどうだった？投げられっぱなしでした。ミロザはアゼルバイジャンのジュニア代表だったからね。どうりで強い、なにもできなかったです。いや、みんな日本人が来たって怖がっていたからね、ミロザはヨウスケと戦いたかったようだ。

道場からバス停までの道のり、固くしまった雪の上にうっすらと積もり始めた雪の上を進みながら、思考は道場の畳の上をさまよい続けた。先生は乱取り稽古のことを「ファイト」と言っていた。柔道の試合は英語で「ファイト」って言うんだろうか。それともこの道場だけの呼び名だろうか。正面に立つミロザの残像。組み合う直前、手のひらで胸を突かれたのを思い出す。あれはいったい何だったのだろう。胸を突く動きは今まで見たことがない。胸を突かれた直後に自分のからだは投げられていた。手のひらの一撃、あれは崩しだろうか。とすれば、あの動きが来たら別様に反応するしかない。あるいは胸を突かせなければ、今日のような投げられ方をしないのではないか。なんとかして「あの技」を防ぎたい。とにかくあんな風に投げられ続けるのはご免だ。バッグの中で柔道着がいっそう湿り気を増して重たくなった気がする。しかしあれほど投げられるとは。

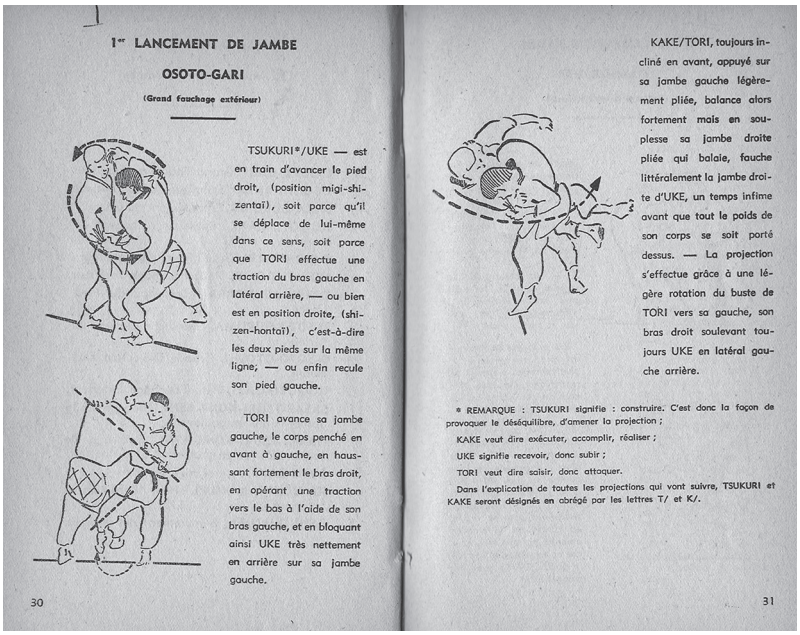
そんな思考をぐるぐるめぐらせているところでバスが来た。

1.「あの技」に縛られる

その後の数日にわたって、私はミロザが繰り出した「あの技」に完全に縛られた。「あの技」はいったい何だったのか。どうやったら「あの技」を防げるか。研究を志す視線は、きわめて私的な感覚と捩じりあっていた。自分は熟練の柔道家ではないし、部活動で柔道に取り組んだこともない。それでも、日本の学校体育で柔道に触れることもあったし、子供のころには町道場に通ったこともわずかではある。Wacquant (2004) やSpencer (2012) よろしく柔道「ファイター」になることを求めて道場に行き始めたわけではないが、自分のからだを制されるばかりでは柔道にならない。それに、この学びの過程自体が研究のネタになるかもしれない。うまくいけば「あの技」を自分も使いこなせるかもしれない。だから、「あの技」をとにかく知ることが、まずは当面の課題のように思われた。

その後少しずつ、「あの技」が形を帯びてきた。それはよくわからなかったあいまいな記憶を言葉に置き換えてクリアにする過程を伴った。さんざん投げられたのは、胸を突かれたことでからだがこわばり、硬直する隙をつくったからではないか。おそらくあれは「変形の大外刈り」だったのではないか。

あるいは突かれてバランスを保とうとわずかに前のめりになった場合、払い腰のような腰わざで大外刈りとは逆方向へ投げるという技とセットで用いられていた。前後を覚えないほど投げられたのもある意味では腑に落ちる。本当に前後に投げられ通したのだから。分析はこのあたりから飛躍し始める。ミロザはおそらく手のひらを突く動きから「変形の大外刈り」と「何かの腰わざ」の二つを組み合わせて使っていた。基本的にこの2パターンを瞬時に使い分けることで、私はひたすら投げられ続けたのだろう。後ろに投げられまいとするのを察すれば「変形の大外刈り」で前方に投げ、前に投げられまいとすれば腰わざで後方に投げる。私も知らぬ間に私のからだが行っていた重心の移動なり、足の移動なりを嗅ぎ取って、ミロザのからだは瞬時に動いていたのだろう。だとすれば、向かってくる手のひらを払いのければよいかもしれない。そのまま前に伸びてきた腕を捕まえて、ミロザを前方に崩すこともできるかもしれない。それを防ごうと反応して後ろに体重移動したなら、そのまま後ろに投げればいいかもしれない。



1er LANCEMENT DE JAMBE

OSOTO-GARI

(Grand fauchage extérieur)

TSUKURI*/UKE — est en train d'avancer le pied droit, (position migi-shi-zentai), soit parce qu'il se déplace de lui-même dans ce sens, soit parce que TORI effectue une traction du bras gauche en latéral arrière, — ou bien est en position droite, (shi-zen-hontai), c'est-à-dire les deux pieds sur la même ligne; — ou enfin recule son pied gauche.

TORI avance sa jambe gauche, le corps penché en avant à gauche, en haussant fortement le bras droit, en opérant une traction vers le bas à l'aide de son bras gauche, et en bloquant ainsi UKE très nettement en arrière sur sa jambe gauche.

30

KAKE/TORI, toujours incliné en avant, appuyé sur sa jambe gauche légèrement pliée, balance alors fortement mais en souplesse sa jambe droite pliée qui balaie, fauche littéralement la jambe droite d'UKE, un temps infime avant que tout le poids de son corps se soit porté dessus. — La projection s'effectue grâce à une légère rotation du buste de TORI vers sa gauche, son bras droit soulevant toujours UKE en latéral gauche arrière.

* REMARQUE : TSUKURI signifie : construire. C'est donc la façon de provoquer le déséquilibre, d'amener la projection ;

KAKE veut dire exécuter, accomplir, réaliser ;

UKE signifie recevoir, donc subir ;

TORI veut dire saisir, donc attaquer.

Dans l'explication de toutes les projections qui vont suivre, TSUKURI et KAKE seront désignés en abrégé par les lettres T/ et K/.

31

図　大外刈りの図解の一例（Kawaishi & Gailhat, n.d., 30-31）

2.「ことば」と「体感」のずれ

こうして、「あの技」を構成する動きの全体性は、体の部分の状況に置き換えられて再構成されていく。言語的な説明は、ひとまず置かれたジグソーパズルの枠組みに、適当な形のピースをあてがっていく作業に似てくる。ただ、しぶとく「あの技」の全容を解きほぐそうとする自分がいる一方で、どうしてもぬぐい切れない不足感もそこには残っていた。あてがわれる言葉が増すことで、徐々に「あの技」の全容が示されていく。しかし、そもそも「あの技」は、手元に持ち得るパズルピースでとらえきれるようなものだろうか。どれほどピースを重ねることで、つまり言語記述を積み重ねることで「あの技」というパズルを埋めていったとしても、それはあらかじめ据えられたパズルの枠組みに収まるようにしか再現されないのではないか。あるいは自分がまだ持っていないピースが手に入れば、よ

り正確に全体像をつかめるかもしれない。それでも、やはり違和感が残る。そもそも、「あの技」は、パズルのようにしてとらえられるものなのだろうか。

ミロザにしたたか投げられたとき、ノービスとしての自分が熟練のミロザにただ一方的に投げられただけならまだ分かりやすい。しかし、私に残された体感はずいぶんアンビバレントなものだった。できる限りの仕方で投げられまいと必死になる、まさにそのことによって私は進んで投げられた。投げていたのはミロザだけではない。投げられていた自分もまた、投げられまいとしながら自ら投げられ、つまり自らを投げるというような出来事に加担するかのようだった[5)]。仮に私が積極的に投げられようとしないならば、私は積極的に投げられたはずはない。あれほど投げられまいと夢中だったのだ。同様に、ミロザが投げたのであれば投げたのは私ではない。ミロザは私ではないし、私はミロザではないからだ。「ミロザが私と一緒に私を投げる」とでも、「私を投げられる」とでもいえばよいだろうか。書き出すほどに整合性のない、アンビバレントなものとして体感が浮かび上がる。

この事態を、たとえばミロザが私の心理状態を巧みに制圧したことの結果として考えることも可能ではある。これ以上ないほど力んだ私のからだは、投げられまいとする強い心理状態に起因しているとみることができる。そうして「あの技」をイメージし続けることで、私は心理的に囚われ、後手に回ったというような、原因と結果に基づく構図に収めることができる。だが、少なくとも私の体感からすれば、〈投げる主体〉と〈投げられる客体〉、〈原因〉と〈結果〉という二分化はどうしてもクリアに過ぎた。たとえばつかみあう両手が互いをつかんでいる体感は、物理的につかみあう瞬間からはみ出して続いていたようにも思われた。つかみ合いを導くそれまでの瞬間からすでにつかまれているようでもあり、畳の上から立ち上がるまでもそれは持続し続けるような感覚。

「あの技」をパズルのように組み立て、書き出そうとするほど、そこからあふれた「体感」がせり出してくる。つじつまがあうかどうかに関わらず、ミロザと私は一つの塊のようだった。物理的な一個体だったと言うのではない。塊のようだったというアンビバレントな体感は、ある面では柔道のような組み合うからだの特性を映し出してもいる。つまり、相手を投げるためには相手をつかまなければならず、それには相手にもまた自分の

からだを深く預けなければならない。投げられたくなければ、近寄るべきではない。その代わり、近寄らなければ相手を投げることもまたかなわない。往々にして、投げることは投げられることと紙一重となり、どちらが投げたのか傍目では覚束なくなることさえある[6]。

3．ヘリゲルの戸惑い

ここで、動きをめぐるアンビバレントについて考える糸口として、オイゲン・ヘリゲルの経験[7][8]を参照してみたい。1940年代に東北帝国大学に滞在していた当時のドイツ出身のこの哲学者は、そこで6年間弓術を学んだ。教えを乞うたのは阿波研造。弓聖とも呼ばれる人物である。

ヘリゲル自身の記述には、彼が直面した困難と、阿波が直面したであろう困難とが隣り合わせで映し出されている。たとえばこんな描写がある。「放れ」を待つことができないのは、ヘリゲルが自身から離れていないからであると阿波が言う。弓を引くのは目的に対する手段のはずであると考えるヘリゲルには、この説明に得心がいかない。的にあてるために弓を弾くのではないのか、というヘリゲルに、阿波は声を上げて答える。弓の道には目的も意図もない。的に射当てるために矢の放れを習得することを目指す限り、「放れ」は成功しない。そのために正しく待つこと、自分自身と自分のもの一切を捨て去ることを諭す。ヘリゲルはなお、意図しながら意図しないようにすることの不可解を表す。阿波はそんなことを尋ねた弟子は今までいないと言い、だから自分は正しい答えを知らないと応える―。

ただ「無心」で弓を放つこと。もしかしたら日本語話者の多くにとって、それはヘリゲルほどの違和感を感じる言葉ではないかもしれない。しかし、「それが放つ」といった言明はヘリゲルには納得しがたいものだった。稽古の歳月を経て、一つの境地に至ったと思われるヘリゲルの語りは印象的だ。

> いったい弓を引くのは私でしょうか、それとも私を一杯に引き絞るのが弓でしょうか。的にあてるのは私でしょうか、それとも的が私にあたるのでしょうか。あの“それ”は肉眼には精神的であり、心眼には肉体的なのでしょうか―その両者でしょうか、それともどちらでもないのでしょうか。これらのすべて、すなわち弓と矢と的と私とが互いに内面的に絡みあっているので、もはや私はこれを分離することがで

> きません。のみならずこれを分離しようとする要求すら消え去ってしまいました。（ヘリゲル 1981：109-10）

ヘリゲルの困惑は、一連の動きに対する言語記述的な説明が整合性をもたないことに起因している。それは、ヘリゲル自身の理解がなお整合性のある様式、「能動態と受動態とを対立させるパースペクティブ」（國分 2017：73）に基づいていることを示してもいる。ここから進む考察の一つは、ヘリゲルの経験を他者集団による特異な思考形式として囲い込んでいくものである。「日本人にとっては、言葉はただ意味に至る道を示すだけで、意味そのものは、いわば行間にひそんでいて、一度ではっきり理解されるようには決して語られも考えられもせず、結局はただ経験したことのある人間によって経験されうるだけである」（ヘリゲル 1981：18-19）。こうした記述にみられるように、非整合的な説明を運用する集団が画定され、そこから禅の考察や日本の弓術論へとより概念的な分析が展開される。論理的で整合性のある記述形式との違い[9]がみとめられるからこそ、そこに異なる思考様式やシステムが想起され、故にそこで共有される性向なりセンスなりが提起可能になる[10]。

4．言語記述化というアプローチ

考えられるもう一つの取り口は、言語記述化というアプローチ自体を検討するものである。ヘリゲル同様、私の経験は能動／受動のパースペクティブに強く依拠したものであった。ミロザとの乱取りは、言語記述化のある種の限界を想起させた。そこから「体感」が別様のものとして現れた。

> 海の底に投げ込まれた測深器が流動体を持ち帰ると、すぐに太陽がこれを乾かして固いばらばらな砂の粒にしてしまう。（ベルクソン 2001：246）

アンリ・ベルクソンが一世紀前に提示した思考は、体感と言語化をめぐるアンビバレントを考える一つの足掛かりになる。ここでいう陸は空間的、海は時間的なものを示している。海の底から引き揚げられたものが乾かされ、ばらばらの砂粒になるように、動きはひとたび言語記述化されれば、すでにそれは動性を失っている。ベルクソンは、これを時間の空間化

と呼んだ。空間化はひとの癖ともいうべきものであり、時間と空間との混同に対する批判は、ベルクソンの思想の一つの柱ともいえる。「あの技」として対象化し、そこから分析が積みあげられることは、まさに時間の空間化であった。その分析は動きそのものについてではなく、動きの軌跡から置き換えられた記号のやりとりになる。

問題は、こうした「空間的な陸」が「時間的な海」を侵食している点だ。動きをとらえるとき、「あの技」というカテゴリー、つまり空間化の作業がいつの間にか滑り込んでいる[11)]。あの日、私が直面した事態、ミロザに投げられ続けるという経験の一部を、「あの技」として括ったのは他ならぬ私である[12)]。「あれはなんだったのか」という漠然とした問いから、「あの技」へ絞り込んでいくプロセスはごく自然に展開された。たしかにそれは私にクリアな説明を与え、その後の分析の起点となった。連続する動きに切れ目を入れ、カテゴリー分けすることで、「あの技」を可能にする知のありよう（たとえば「暗黙知））を想起することも可能になる。あるいは「あの技」を共有する集団を画定することも可能になり、その集団内で共有される性向（たとえば「ハビトゥス」）の設定を可能にする。それらは、今こうして語るまさにその対象を用意するプラットフォームである。あるいは、ひとまず置かれたジグソーパズルの枠組みのようなものだ。いくらピースを変えたところで、全体像の大枠は既に決まっている。

それは、連続して、未分で、あいまいだったはずの動きを、分断され、固定されたピースによって遡及される事柄に置き換えていくプロセスでもある。「あの技」は一連の動きの中に「あの技以外」を設定することでもあり、それは「あの技」の始点と終点とを刻むものになる。動きに「あの技」というラベルが付き、たとえば他者の動きの中にも同じ「あの技」を見いだす参照点となる。こうして、言語記述化はわれわれをニュートン力学的な分断に引きずりこんでいく。通時と共時という時間軸を考えるなら、それは通時の軸を分断していく。

「あの技」はまた、共時の軸を切り分けていく。たとえば「あの技」の始まりは、ミロザが私の胸を突いたときだった。それは私の右手がミロザの襟にもう少しで触れるときでもあった。それは私の右足の裏が畳からわずかに離れたときでもあった。その瞬間に同時に起きていたことがらは次々に切り出されていくが、「そのとき」というような言語記述によって同時性が保たれる。しかし、ひとたび言語記述化され、ばらばらに示され

たことがらは、その同時性を失っている。これら併記された動きを声に出して読み上げてみればそれが鮮明になるだろう。列挙された記述を同時に読みあげることはできない[13)]。

言語記述化は、動き、絶えず変化する事柄を、通時的にも共時的にも独立した「点」へと分断していく。点をいくらつないでも、もとの動きを再構成することはできない[14)]。未だ分かたれずにあったようなことがらがもつあいまいさ、「水の中にある水」（バタイユ 2002：23）とでもいうべき特性は失われてしまっている。「あの技」をめぐる記述がどうしてもクリアに過ぎると思われた私の体感は、この失われていくあいまいさ、相互にはみ出しあう時間の残響のようなものだったのかもしれない。私はミロザではないが、ミロザは私でもあるような瞬間。投げられながら、投げるような瞬間。記述によって近づけば近づくほど、遠ざかっていくような瞬間。

5．禅問答

> 「研究されている新しい対象と、すでにわかっていると信じられているほかのさまざまな対象との間の接触点が、できるだけ多く、記述される。」（ベルクソン 2001：207）

分析とは記号への翻訳であり、その展開であるとベルクソンは言う。そしてそれは、ある対象をそれではないものの函数としてとらえて取り扱うものであり、そこでの記述は「できるだけ多く」、つまり空間化へと方向づけられている。とすれば、言語記述を独特の仕方で迂回する阿波研造の振る舞いは注目に値する。

> あなたの代りにだれが射るかが分かるようになったなら、あなたにはもう師匠が要らなくなる。経験してからでなければ理解のできないことを、言葉でどのように説明すべきであろうか。（ヘリゲル 1982：34）

誰が射るのか、というヘリゲルの問いに対して、阿波はこのように応えている。それは、弓を射る主体が誰なのかという問いに直接的な答えを投げ返さないばかりか、さらなる言語記述化へのやり取りを断ち切るような応答である。これを、解答の隠避として受け取ることもできるが、そういった見方は「弓を射た主体がそこにある」という枠組みに既にとらわれ

ている。誰が？という問いが、まさに行為の主体を想定するように、言葉による説明は、一連の動きの中に主体や客体といったカテゴリーをずらずらと引き出してしまう。阿波との稽古を振り返るヘリゲルは、自らの思考様式が「すべて言葉を手がかりに理解するほか道がない」（ヘリゲル 1982：18）ものとして深く内面化されていることにふれてもいる。そしてそれが、阿波との稽古ではアンビバレントな形で生起していることに自覚的でいることは、「それをみずから経験したことのない者には、言葉ではそれが言い換えられるだけで、とうてい言い表わすことはできないという事実を、知ることもできない」（ヘリゲル　1982：52）というヘリゲル自身の記述にも看取できる。しかし、その把握もまた、結局は経験したことがらを「それ」として言葉で言明しなければならないという言語的な限界に把持されている。あるいは、阿波の応答の行間に何か意味するものを探そうとする見方もまた、意味をそこに先取りするものだ。これは、言語記述化にたよる者、言葉を「まずはじめにあるもの」として深く内面化する者が引き受けざるをえない限界だろうか。

６．言語記述化を避けるという構え

阿波という個人の言葉に、固有の集団に共有される世界観やハビトゥスの発露を求めるのではなく、阿波の言語記述化という行為、彼の振る舞い方それ自体に着目してみる。そこには〈問いかけが要求してしまうような答えの様式を退ける〉という別の見え方が浮上する。たとえば、ヘリゲルが無心の射を実現するために指先の技巧をもって行おうとするのを見抜いた阿波が、ヘリゲルの弓を取り上げ、無言のまま座布団に座ったというエピソード。あるいは、ヘリゲルの質問に答える代わりに、阿波が暗闇の中で見せた無言の射――射放たれた二本目の矢が的に的中した一本目の矢筈を貫いていた――をめぐるエピソード。阿波の振る舞いに見いだされるのは、できる限り言語記述化しないというひとつの構えである[15)]。たとえるなら、それは絶え間なく言語分節へと向かう流れに飛び込みながら、なお流れに踏みとどまるようなアプローチであり、踏みとどまることによって、その先に自らを繋ぎとめている体感の存在を暗示するものだ。

こう考えると、帰国を控えたヘリゲルに阿波が送ったメッセージも興味深い。弓の鍛錬を報告するための手紙は不要とし、代わりにその記録写真を送ることをヘリゲルに求めている。それだけで知るべきことは知ること

になるのだという。そこに察せられるのは、記述されたものの薄さではなく、記述するという行為に対する薄さである[16)]。私が経験した「私を投げられる」というようなパラドキシカルでアンビバレントな書き口も、阿波の構えを踏まえると別様の見方ができる。能動／受動の構図では記述しようのない経験をいかに記述するかという試みの成果としてではなく、言語記述化で生じてしまう事柄――たとえば原因と結果という分断――をぼやかせ、できる限り留保するひとつの行為としてである[17)]。

> 分析は対象の周囲を回るように宣告されているのに、対象をだきしめたいという永遠に満たされない欲望をいだいて、いつまでも不十分な表象を十分にするために、限りなく観点を積み重ね、また、いつまでも不完全な翻訳を完全にするために、倦むことなく記号を変えて行く。だから分析は無限に続く[18)]。（ベルクソン 2001：206）

7．とらえるということ

ミロザとの乱取りは、私自身の構えを変えるものとなった。一方で「あの技」にとらわれ、一方で「あの技」という設定自体を問い返しながら、そのあいだに浮き彫りになったのは、言語記述化をめぐる方法論的な問題である。言語記述化は、生のものを切り取り、凍らせて取り扱うような営みである。その限界は、溶けも腐りもする生のものを凍らせて取り扱うことで、匂いや手触りを取り逃がすだけではない。そもそも言語記述化――凍らせるというアプローチを志向するとたん、溶けつつも腐りつつもあり、あるいは嗅覚と触覚の対象として別々に扱われる以前のあいまいな様態を、既に切り離した形でしか想起できなくなることだ。

ミロザとの乱取りはまた、私自身が直面していた「言葉の壁」の見え方を変えた。教室をよく見渡せば、ネイティブスピーカーの言葉も決して一様ではない。なまりもあり、独特の言い回しがある。ときに言い澱み、聞き返され、静まり返る静寂の瞬間がある。カタカタと響く貧乏ゆすりの音。無言として記述されるような瞬間は、決して無音ではない。動き――生成変化する日常のあらゆること――には、あいまいで、互いに重なり合いながら響く重奏的なノイズが生じている。ノイズがなければ、選り分けるべき音も聞き取りようがないし、切り分けるべき動きを見いだすこともできない。言語記述化は、それらノイズを削ぎ落し、カテゴリーへと回収

していく強い流れそのものである。カテゴリーに基づく営みが分析であり考察であるとするならば、それを導いたあいまいなことがらはそもそもどうとらえられたのか。そこに別様の、新たなとらえかたができるのなら、新たな言語記述化――空間化、分析、考察――もまた可能になるのではないか。

湧き上がるこうした問いを梃子にして、私のアプローチは多くの研究とはなにか反転した方角へと進み始めた。それは、対象、つまり既にとらえたことがらについての検証や考察ではなく、まずはとらえるということを問題とする。未分の、つまり同時に生起していて、その余韻が互いに溶け合うような変化[19]をできるかぎり断ち切らずにとらえること。言語記述的な描写や検証を導く手前の、対象になりえることがらを対象化するような、学術的な営みを支える下準備のような実践に注目することである[20]。

8．図と地の反転

これらをもとに提起されるのが、方法としての「薄い記述thin description」(Washiya 2019: 46) の実践である。とらえるということに重きを置くために、いかに記述を重ねていくかではなく、記述すること自体をいかに削ぎ落すかに焦点を当てる。たとえるなら、それは図と地を反転させるような試みである。言語記述化が図を記すことで描写するとすれば、そこにはすでに地が用意されている。そうではなく、地をとらえることから図を浮き彫りにしていく。それは、版画の製作に似ている。図（考察の対象）は地（対象になりえることがらの対象化）を掘り起こしていくことで事後的に浮かんでくることになる。

「薄い記述の実践」を具体的に試みるために、私はビデオカメラを持ち出した。映像製作という試みは、近年様々な形で取り入れられている（たとえばVannini 2015a, 2015b[21]）。その背景には、特に近年の研究の多くが、言語中心主義の限界性を乗り越える方策として映像に注目していることが挙げられる（Grasseni 2004, Banks & Ruby 2011）。その一方で、言葉を相補するものとして映像を持ち込む限り、映像自体は概念的な――つまり言語記述的な議論ができないことが強調され、結果的に言語記述化の重要性を示し直すことにもなる[22]（MacDougall 2006, Pink 2011）。それに対して、私がビデオカメラを持ち込むことは、まさに記述するという行為をできる限り留保すること、薄い記述を具体的に実践する試みである。それ

は記述を補うためのものではないし、計量的に言語記述を減らすものでもない。あくまで言語記述という行為を薄くすることにその力点があり、それによって「とらえるということ」に注力しなおすものだ[23]。言い換えれば、とらえるということを問い直すために、言語記述化というアプローチの展開を別様に進める試みである。

薄い記述の実践は、学術的な営みにおける成果物（プロダクツ）とその探究（プロダクション）とのあいだに引かれる境界線を突き崩すものにもなる。たとえば手書きのフィールドノートがそのまま学術論文として掲載されないように、事象が生起した瞬間と、フィールドノートに記述する瞬間、さらにはそれが活字化され読まれる瞬間には幾重の隔たりが生じている。現に本稿には、私が書きなぐったフィールドノートの乱れた字はないし、ノートに記されずにある背景が事後的に書き足されている。流れ滴る汗の不快をキーボードで打ち込むとき、私は汗などかいていない。それに対して、たとえば映像製作の成果物は、私のからだが経験するその瞬間を直截に反映する[24]（Washiya 2017）。それは、学術的なプロダクツとプロダクションとの隔たり[25]をいっそう約め、あいまいにしていくような「未分のアプローチ」ともいうべきものになる。あるいはそれは、英語でparticipant（参与）observation（観察）として弁別したうえで連結されるような行為を、両者の組み合わせとしてではなく、その境界をあいまいにしたもの、一筆書きの、partcipantobservationとでも言いかえられようか。

そこには、言語記述化における日本語的な可能性も見いだすことができる。たとえば、英語にはartisticとestheticという二つの語があるが、それぞれ「行為」と「知覚」という経験の二つの側面を示すものだ。しかし、両方を同時に示す語ではない（Dewey 1916, Dewey 1934）。対して、日本語には「美」という一語でそれらをとらえるようなあいまいさが残されている[26]。同様に、日本語的な意味での「知」という一語が可能にしているのは、まさにこの知覚と行為をまたぐ――対象としての知識と、知るという行為――両義性[27]ではないだろうか。とすれば、「身体知」と呼ばれるものが、英語で言うbodily knowledgeと呼ばれるものと対の関係にはならないことに留意しなければならないだろう。まさにそのずれには、言語記述化による分断を避け、未分のままで対象をとらえるという実践の可能性が垣間見えている。日本語的な「知」という語は、既に動きを含みこんでいる。何か外在するものとして普遍性を帯び、そのやり取りを想定するこ

とでむしろ外部と内部、未知と既知を切り分けているようなことがら――しばしば知識と呼ばれる――よりも、それはずっとダイナミックで、外在とも内在とも言い切れないあいまいさをはらむ[28)]。ここには、たとえば学習＝「知識」の「体得」といった一般的な構図とは異なる回路が見いだせる。

ミロザとの乱取りは、体感のアンビバレントを浮き彫りにした。ヘリゲルの経験と照らし合わせることで本稿が提起するのは、薄い記述の実践――分節から未分へ、明瞭からあいまいへ、空間から時間へと重心を移し替えるような、別様な構えに基づく方法論の可能性である。それは、分析の一歩手前の「とらえるということ」を、あるいは知識に至る道筋ではなく「知」を探りだす歩みかた自体を喚起するものだ。

たとえば、映像作品のような未分のアプローチを前面に出した成果物が、既存の学術誌に「掲載」されることはないだろう。「査読」もしようがない。そもそも映像作品は学術的成果でありえるのか？アートが学術になりえるのか？こういった問いが振り向けられるとき、既にそこには学術的なものが特定のしかたで規定されていることもまた逆照射される。薄い記述の実践は、むしろこれまでクリアなものとして扱われてきたようなことがら――たとえば、アートが学術になりえるかと問うときの、「アート」や「学術」という囲い――をあらためてあいまいにしていくようなものだ。それが可能にするのは、「学術的なものとは、どうあることができるのか」というような別様の問いかけである。

＊＊＊

「あの技」に縛られ、その縛りをさまざまに考えているうちに、ミロザは道場に現れなくなった。結局「あの技」についてミロザに聞くことはかなわずにいる。私はカナダを離れ、柔道着は家のどこかで眠っている。

注

1）この道場にあっては特に若い参加者たちの腕試しの意味合いが強く、「スパーリング」とほぼ同義で扱われている印象だった。

2）その成果は、Washiya (2015) に収められている。道場の実践を、「Japaneseness日本らしさ」を基軸に論じながら、「日本らしさ」それ自体は宙づりのまま考察を進めた点に限界があった。この限界と向き合うことも、博論での課題であった。

3）後日、先生一家はクリミアタタール人で、ウクライナに住んでいたことを知った。クリミア危機後、故郷に残した家族とはうまく連絡が取れているが、そこを訪れることは極めて難しくなったことを聞かされた。先生夫妻はともにウズベキスタンで生まれ育っている。スターリンの強制移住に遡る流浪の生活史については、別稿で詳しく論じたい。

4）体重（階級）はしばしば確認し合われた。体重が近ければ練習で組む事も増える。

5）それは井上靖の小説「夏草冬濤」の一節を思い出させるものだった。

6）それが傍目でよくわからなくなるのが、たとえば「内股すかし」のような技である。アテネ五輪での篠原選手の決勝戦が物議をかもしたのもその一例として考えられる。

7）ヘリゲルの経験がつづられた書籍は、西欧世界に禅を広めるきっかけとなり、また一面的な理解を広めるものにもなったとされる（Watts 1957, Ogata 1959）

8）日本語では主に「Die ritterliche Kunst des Bogenschiessens」（「日本の弓術」）と「Zen in der Kunst des Bogenschiessens」（「弓と禅」）の二冊が知られている。前者（初稿）から12年後に後者（決定版）は出版されているが、前者（新版）あとがきに訳者がよせたコメントに注意したい。「初稿の第二章にみられる著者の体験の簡潔直截な描写は、決定版においては、数倍にも敷衍され、哲学する著者の省察の叙述になっている。日本の弓道化ならば、おそらく一言または一挙動をもって表現ないし暗示しうることが、ここでは百万言を費やして説明される。」（柴田 1982, 111-12）

9）これを言語運用の問題として考察することもできる。たとえば國分（2017）が論じるように、能動／受動の二項対立は一つのパースペクティブでしかない。問題となるのは、われわれはこのパースペクティブにどっぷり浸かっており、それ以外を想起する際にもこのパースペクティブに依拠してしまうことである（國分 2017）。

10）ヘリゲルの経験をハビトゥスの問題とする論考もある（例えばInoue 2006）。概念としてのハビトゥスに基づく分析は、他者集団の画定を要件とする点で通底している。

11）柔道において、個別の動きは体系化されて教示され、技は目録的に整理されるのが一般的である。目録的な整理への回収を「技法化」と言い換えてもいいかもしれない。

12）多くの研究は「技法」的な枠組みに依拠してきた。「すべてのものの身体が同じように動き、すべての顔が同じ仮面をかぶり、すべての声が同じ叫びをあげる…（中略）…踊りの熱狂、動作の熱気に巻きこまれて、かれらはもはやひとつの身体、ひとつの塊にすぎなくなる（モース1973：199）」。「同じ」という語が幾度も繰り返されている点に端的に表れるように、身体技法という枠組みでは、同一性の「発見」がその要件となる。「同じ」を画定するのは、言語記述化の重要な機能である。

13）ベルクソンは動きと空間の混同を指摘しているが、それは以下のようにも言い換えられよう――記述は同時に動く事柄を別々に示しながら、なおそれらを同時に動くものとして読み手に諒解させる。

14）これをベルクソンは再三指摘している。「概念や観点でもって、一つの物を作ることは決してできない」（ベルクソン2001：225）

15）バルトは俳句における言語感を「言語に見切りをつけるということ」（バルト 1996：118）と表現し、ヨーロッパ的言語感覚との差異を強調している。阿波の振る舞いはこの「見切り」を体現しているともいえる。その意味では彼の言葉が「不思議な比喩やもうろうとした比較」（ヘリゲル 1981：112）になることも頷ける。

16）写真や画像が直観に替わりえないことを明記しつつ、ベルクソンは多種多様なイメージは直観をつかむべき場へと導きうるとする（Bergson 1912）。阿波とヘリゲルとが共有する構えがここに看取できるかもしれない。

17）同様のことはオノマトペを使うことにもいえるのではないだろうか。

18）時間と空間との比較を基軸に、ベルクソンは「intuition直観」を提起している。様々に説明がなされているが、本稿の関心に引きつければ、それは一般的な学術的実践が追及する客観的な知識の獲得ではなく、対象が弁別され類型化される前の、知に至るプロセスとして理解できる（Polkinghorne 1988）。ただし、直観がいかに行使されるものかははっきりと示されていない。明示されることで失われるような特徴こそが直観の本質かもしれないが、本稿はそこにプラクティカルな構えを提起するものだ。より精緻な議論は今後の課題としたい。

19）それは視覚的なもの（共時的）と聴覚的なもの（通時的）とが入り組んでいる。

20）事象が知性によって整理される前の、なにか野生ともいえる次元に立ち戻る試みである。ただし、それは「本能」へと還元されてはならない（ベルクソ

ン 2001）

21）彼のアプローチにみられるような、対象――表象といった定型を突き崩す方法論的な志向（non-representational methodologies）を本稿は共有している。同時に、表象への着目は、本稿が言語記述化という行為に着目する点と異なる。

22）ベルクソンにおいても、映像的なものの可能性を挙げつつ、それが空間的な思考の様式 “cinematographical mechanism of thought”（Bergson 1911：313）に変わりないこともまた指摘されていることに注意したい。

23）学術的な映像製作においては、ヴィジュアルメソッドとしてくくられ、視覚情報が前面化されるケースが多いが、映像とともに記録される音の連続性にこそ注目したい。音声的な言語記述化は視覚的なものよりはるかに時間的だ。このことは、ベルクソンが再三音のメタファーに言及していることにも通じている。

24）ではビデオカメラを置き去りにしたらどうなるか。私は動きに参与でき、録画も同時に進んでいく。参与観察の様態はたしかに変容する。この点は稿を改めて論じたい。

25）Wacquant（2005）は実践の外部から「プロダクション」のただなかへのシフトを提起するが、その重心は “ネイティブ” の性向を身体化することに向けられる。対して、本稿の重心は研究の成果物に対置されるプロセスとしてのプロダクションに置かれている。

26）弓術には、「離れ」や「射」といった独特の語の運用がみられるが、これらにも名詞と動詞を含み合わせるような重層性が考えられる。

27）Ingold（2011）は、エスノグラフィーが観察と記述とを分断していくことを指摘し、人類学をそこに対置している。さらに、観察することと創造的な実践との二重性に人類学とアートの共通性を見いだしている。アーティストが世界を多様な仕方で描きだすその行為は、同時にアーティストをその世界に引きずり込むものでもあるとする二重性は、本稿が提起する知覚と行為との重なりにも通底している。

28）奥井（2015）は「技」の一語で捨象されうる多義性を逃さないために、ひらがなで〈わざ〉と記している。あいまいさに開かれた日本語的な運用はここにも看取できる。

文　献

Banks, M., & Ruby, J., 2011, *Made to be seen: Perspectives on the history of visual anthropology*, Chicago, University of Chicago Press.

バタイユ，ジョルジュ，2002，湯浅博雄訳，『宗教の理論』，筑摩書房

Bergson, H., 1911, In Frye N. ed., *Creative evolution*, New York: Holt.

Bergson, H., 1912, In Hulme T. E., Bergson H., & Whitney C. (Eds.). *An introduction to metaphysics*. (1st ed.). New York: G. P. Putnam's Sons.

ベルクソン，アンリ，2001，矢内原伊作訳,『ベルグソン全集 7　思想と動くもの』，白水社

Dewey, J., 1916, *Democracy and education: An introduction to the philosophy of education*, New York: Macmillan.

Dewey, J, 1934, *Art as experience*. New York: Minton, Balch & Company.

ヘリゲル，オイゲン，1981，『弓と禅』（稲富栄次郎・上田武訳）福村出版

ヘリゲル，オイゲン，1982，『日本の弓術』（柴田治三郎訳）岩波書店

Grasseni, C., 2004, "Video and ethnographic knowledge: Skilled vision in the practice of breeding", In S. Pink, L. Kürti & A. I. Afonso eds., *Working images: Visual research and representation in ethnography*, London: Routledge, 15-30.

Ingold, T., 2011, *Being alive: Essays on movement, knowledge and description*, New York: Routledge.

Inoue, S., 2006, Embodied Habitus. Special Issue on Problematizing Global Knowledge. *Theory, Culture & Society*, 23(3), 229-231.

Kawaishi, M. & Gailhat, J., n.d., *Ma Methode de Judo*. Federation Francaise de Judo.

國分功一郎，2017，『中動態の世界：意志と責任の考古学』医学書院

MacDougall, D., 2006, *The corporeal image: Film, ethnography, and the senses*, Princeton, NJ: Princeton University Press.

モース，マルセル，1973，『社会学と 人類学　Ⅰ』(有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳)弘文堂

Ogata, S., 1959, *Zen for the West*, Dial Press.

奥井　遥，2015，『〈わざ〉を生きる身体――人形遣いと稽古の臨床教育学――』ミネルヴァ書房

Pink, S., 2011, "Digital visual anthropology: Potentials and challenges", M. Banks & J. Ruby eds., *Made to be seen: Perspectives on the history of visual anthropology*, Chicago: University of Chicago Press, 209-233.

Polkinghorne, D. E., 1988, *Narrative knowing and the human sciences*, Albany: State University of New York Press.

バルト，ロラン，1996，宗左近訳，『表徴の帝国』，筑摩書房

Spencer, D. C., 2012, *Ultimate fighting and embodiment: Violence, gender, and mixed martial arts*, New York: Routledge.

Vannini, P, 2015a, *Non-representational methodologies: Re-envisioning research*. New York: Routledge.

Vannini, P, 2015b, Non-representational ethnography: new ways of animating life-worlds, *Cultural Geographies*, 22(2), 317-327.

Wacquant, L. J. D., 2004, *Body & soul: Notebooks of an apprentice boxer*, New York; Oxford: Oxford University Press.

Wacquant, L., 2005, Carnal Connections: On Embodiment, Apprenticeship, and Membership, Qualitative Sociology, 28(4), 445-474.

Washiya, Y., 2015, Legacy and legitimacy: historical ethnography of a judo dojo in Montréal, Canada. *Sport in Society,* 19(7), 1083-1095.

Washiya, Y., 2017, Shaky footages from the field – Experience of film ethnography in a judo gym, Bundon, A. eds., *Digital Qualitative Research in Sport and Exercise*, Routledge.

Washiya, Y., 2019, Invitation to Ethno-Kinesiology, Ph.D dissertation at University of Toronto.

Watts, A., 1957, *The supreme identity: An essay on Oriental metaphysic and the Christian religion*, New York: Noonday Press.